

---

**世界を壊せや勇者様 ~ world is broken a man of valour ~**

翡白 翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を壊せや勇者様  
World is broken  
a man of valour

### 【Nコード】

N9191W

### 【作者名】

翡白 翠

### 【あらすじ】

俺は昨日、前からずっと好きだった少女、朱里に告白した。OKをもらえて、最高にテンションがハイになっていた。なかなか眠れぬ夜も、終わり、何とか眠れた次の日、目が覚めるとそこは異世界だった……！？

主人公最強型超厨二復讐ファンタジー！！

「一話、異世界に召喚されたら、そこには夢という名の肉（乳）があり……！！？」

目が覚めた。ここはどこだろう。前後の記憶が曖昧だ。目を開けた。目の前に見えるのは？ 乳、乳、乳。

「は！？」

俺は悲鳴をあげた。何故俺の目の前に巨乳があるのだろうか？

まったくもって判断できない。前後の記憶も曖昧なまま。記憶喪失なのか？ と、自問する。

「お目覚めですか、勇者様？」

目の前のデカ乳美少女が俺に聞いてくる。ふつうの男なら一目惚れしていただろう。並の男じゃなくても一目惚れしていただろう。

人形のような端正な顔立ちに、スラっとのびた、長い髪。俺だつてきれいだと思う。だが、俺は、

貧乳派だ。

派閥というので、自分の欲望は抑制できるものと、俺は今知った。グルツと周りを見る。ここは……石造りの部屋だった。石造りといっても、不思議なことにごつい雰囲気は全くなく、神秘的な感じがした。自分の下にある魔法陣もそう思わせる一因になっているだろう。ただ、

「ここはどこだ？」

俺が疑問の声をあげるような場所だというのは確かだ。神秘的だといっても魔法陣は魔法陣。オカルト的な感じがするといつてもいい。それと、目の前の美少女。俺を勇者様と呼んだ。その二つから仮定する。俺は異世界に転移された。または、ただ単に誰かのいたずら。その二つの可能性が考えられた。だが、冷静に考える。魔法陣と、今の俺の思考。どっちが非科学的か……

俺の思考だな。

「ここはどこだ？」

わからないならとりあえず質問。これまで16年だか17年だか

生きてきて、俺が得た結論だ。

「ここですか……帝国神殿ですね……」

帝国……帝国か。俺がもと居た地球という世界では、帝国なんて聞いたことがない。

「なに帝国だ？」

当然のことを聞いた。その前の名前がわかれば、地球……のことなのか。それ以外の世界なのかがわかる。ドッキリという線は、目の前の美少女が着ている服。無駄に高そうな神官服。使い込んでいる雰囲気があり、なおかつ神聖で高そうだ。こんな服を用意するのは、一介の高校生にするドッキリとしては度が過ぎているだろう。

「ミルド帝国ですね」

そんなことも知らないのか。勇者様は。とでも続きそうな調子で、美少女は言った。

「ありがとうございます」

感謝し、俺は立ち上がった。こんな場所にいる意味はない。俺は早くもとの世界に戻るんだ。

俺は歩きだした。早く朱里に会いたい。その一心で、俺は歩きだした。だが、美少女が止める。もう一度冷静になって周りを見渡すと、ほかにも何人も巨乳美少女が居た。貧乳は居なかった。残念だ。「どこに行かれるのですか？」

はじめの巨乳美少女に質問された。

「もとの世界」

一つだけ呟くと、俺はまた歩きだした。また止められる。そんなに俺と話したいのか。俺は話したくないんだがな。

「王様と謁見していただかないと……」

困ったように巨乳美少女は言う。さっきの服が神官っぽいから、エルフちゃんでもいいや。

「王様？」

と俺は聞く。王様が居る国なんていくつあるだろうか。無知な俺は地球の知識でもわからない。まあ、仕方ない。俺は無知だ。

「はい。王様です。勇者様を召還されたので、任務を頼みたいと仰っております」

勇者。任務。その二つのキーワードから連想されるもの……魔王。俺は魔王討伐の手駒にされるのか？俺は元の世界に帰りたいたいだけなのに。だが、王様と言うんだから、元の世界に帰る方法くらい知っているのではないだろうか。俺は考えた。

「わかった。行くよ」

十数秒後、俺はそう答えていた。

一話、反逆の狼煙を上げるのはこの部屋からでいいよなっ!?!? (前書き)

誤字や脱字を見つけた方は報告していただけるとありがたいです。

「二話、反逆の狼煙を上げるのはこの部屋からでいいよねっ!？」

巨乳エルフに連れてこられた先は、厳格な雰囲気がある、扉だった。無駄に沢山の装飾が施されている。成金趣味とは違った空気を持つ、気位の高そうな扉だった。

「この先か？」

俺は聞いた。この扉の先に、俺をこんなところに連れてきた張本人がいるのか？俺は迷った。この先に行つて、素直に魔王討伐の任務を受けるのか？わからない。とりあえず、後のことは後に決めることにした。

「はい。この先に王様がおります」

当然のようにエルフは答えた。

「入つていいのか？」

再度聞く。まあ、断られるわけではないだろう。

「はい、無礼がないようにしてください」

勇者より、王族の地位の方が高いのか。仕方がない。

「わかった」

そう言つてから俺は、扉を開けた……

空気が変わった。頭を全包围から刺すような空気。それが俺の頭上から発せられていた。やばいつ、俺は思った。呑まれる。この空気に呑まれたら、俺の自我はなくなる。直感的にそう思った。

「頭が高い!!!!!!」

宰相？ だろうか。背が高く、すらつとした雰囲気を持つ男が、言葉を発する。それと同時に、宰相らしき男の横にいた王が、こちらへ視線を……

痛い。痛い。痛い。視線が痛い。気を抜かずとも、このままでは呑み込まれる。痛い視線を受けた瞬間。思考すると同時に、俺は頭を下げていた。これは、やばい。

「そちが、今代の勇者か？」

王が聞く。

「はい、そうであります」

俺は答えた。呑まれそうになりながら、何とか、言葉を発した。

「そうか、魔王討伐を、【頼めるか？】」

グサツ、言葉の針が俺を貫いた。なんなんだろうか。頼めるか？のところに、異様に力がこもっている気がした。魔王討伐のことなど、俺の頭から抜け落ち、この王の力ばかりに目がいく。そして、召還した勇者相手に威圧的な方法を取る王に従うことができるのか？

その疑問にたどり着いた。いいのか？ 従って俺は魔王討伐の手駒になっていいのか？ そして……魔王討伐にいったら、元の世界に……、朱里の所に、戻れるのか？

「つかぬことをお聞きしますが、」

俺は言葉を発し始める。なんだろう。一瞬部屋の中がザワツいた気がするが、俺は上から来る空気に対抗することで、精一杯だった。「なんじゃ、言うてみい」

若干挑発的な態度。俺はそう思った。挑発……しているのだ。この王は、勇者を挑発しているのだ。なんだろう、殺意？ が湧いてきた。

「俺が元の世界に戻る方法って、ありますかね？」

向こうが挑発してくるなら、こっちだって挑発し返してやる。挑発するような口調を入れて、俺は言った。

「魔王でも倒せば、帰れるんじゃないのかえ？」

疑問に疑問で返された。ふざけたような口調。嘘か真かは、俺に判断できない。判断したい……。頭の中に真贋判定という文字が踊った。真贋判定>アリスイアブセマ<？やってやる。それと同時に、俺の頭の中に、文字が流れた。

「贋です」

そうか、と俺は一人うなづく。



「!!!」

謎の悲鳴が数々上がる。人を殺すことに、俺は心を痛めたが、魔法という人外を使ったことにより、不思議とそれは和らいだ。

「彼女と付き合い始めたばかりの人間を、召喚するんじゃないよ」

俺は吐き捨てるように言った。それを見、まだ死んでいない人々が俺を睨みつける。

「なぜっ、私のスキルが効かぬっ？」

王様は疑問の声を上げる。まだ死んでいないのか、と思い。

「《ミクロスフォティア》」

と、詠唱をする。俺の中の魔法力>マジアズイナミ<から小さき火がエネルギー体として出る。その火は誰にも触れないまま、王の心臓に近づき……弾けた。

「なっ！」

王の断末魔の叫びが部屋の中に響く。

「さようなら、愚しき王様>イリスイオヴァスイリヤス<」

そう俺は呟いた。辺りを見渡す。先程の巨乳美少女、エルフが見えた。

「どうだい？ 気分は」

俺は聞いた。

「なぜっ、こんなことをっ」

エルフは俺に聞いた。当然の疑問だろう。だが、

「質問に質問で答えるなって、親に教わらなかったのか？」

俺は相手の質問を無視する。エルフは今この状態で、死にそうだ。

熱さのためか、顔を歪ませ、こちらを睨んでくる。

「こっちの質問に答える気はないのか」

先程の熱き隕石>ケオメテオリティス<の出力を強くする。

「熱いつ!? 熱い!!!」

エルフが悲鳴を上げる。内容上俺の質問の答えに適した回答だ。

「そうか、」

俺は満足した。ついでに、先程の質問に応えようと思った。

「俺がこんなことをやる理由？ 当然じゃないか。俺の未来を奪った奴らへの、人外による復讐>エクズイキスイ<さ」

厨二的ワードを交えながら言う。そんな回答している間に、人々の生体反応は限りなくゼロに近づく。屍と炎と岩の山。その中心に俺は立つ。とりあえず、真贋判定>アリスイアブセマ<でこの部屋内の生存者の数を確認する。

「存在します」

「チツ！」

俺は舌打ちした。真贋判定>アリスイアブセマ<を使っても、生存者の数まではわからなかった。予想外に使い勝手が悪い。便利なのは事実だが。

「助けて……助けてください……」

エルフが、俺に命乞いをする。目障りだな。と俺は思う。先程王に放った魔法と同じ魔法を放つ。

「《ミクロスフォティア》」

小さな火が、エルフの心臓を焼き焦がした。

「さてと、行くか」

俺は部屋を後にした。

三話、とりあえず出ていく途中にした決意（前書き）

誤字や脱字があったら、報告していただけるとありがたいです



「《地獄谷>コラスイキラザ》」

兵士長が奈落の谷へ落ちていく。いとも簡単に兵士長を落とされたことに、兵士たちは驚きを隠せないようだ。完全に逃げ腰な兵士までいる。

「つまらないな」

俺は一言つぶやいた。煎餅の様な硬いものを食べたいのに、プリンを出されたような気分だ。

「《大きな地獄谷>メガロスコラスイキラザ》」

兵士たちの多くを、奈落の谷が襲う。見たこともないような大きな呪文。見たこともないような効果の呪文。見たこともないようなニンゲンの呪文。それが兵士を襲う。兵士たちは抵抗することもできずに、殆どが奈落へ落ちた。地下三十メートルくらいだろうか。俺は勝手に予測する。まあ、三十メートルに埋まっているなら、誰か未来の人が掘り出してくれるだろう。

残った兵士が、

「仲間の敵!!!!!!」

と言いながら、俺に剣を振るう。

「《堅き楯>スクリロアスピダ》」

謎の透明な楯。それが兵士を遮る。

「俺のせめてもの慈悲だ。お前くらい生かしてやるよ」

俺は完全な勝者の笑みを浮かべながら、兵士に言い放った。

「覚えとけ、俺は世界を壊す勇者>カラストロフィプロタゴニステイスクだ」

そう言い放って、俺は部屋の前を後にした。

清涼な風。それが俺を包んだ。CO2が少ない。現代の汚染された風とは違った風だった。

「清々しいな」

俺は無意識下で、呟いていた。清々しいと言っても、帝国神殿の兵士を何百人単位で殺し、王を殺し、文官を殺し、エルフを殺して

きた後だ。血の匂いは自分自身と背後から漂っている。前から来る世界の息吹。後ろと自分から漂う世界の末路。二つの匂いを浴びて、俺は決意を固めた。

俺は、世界を壊すんだ。

どうだっていいじゃないか。俺が生まれて初めて彼女ができて、人生が最高にハイだった翌日。無理矢理誘拐された世界。いうなれば、この世界は誘拐犯の家だ。誘拐から脱走したが、誘拐犯の家にはとらわれた。ならば壊そう。この家という名の世界を……壊すんだ。

#### 四話、街を探索しようとしたら見つけたものは!?

神殿の敷地を抜けると、そこには街が広がっていた。活気があり、人々が群れる街。どこの店でも、店先の売り子が声を張り上げ、奥の店主が金の計算をする。カランコロンと鈴の音が鳴ると、いらっしやーいと声が響く。なんて活気がある街なんだ。壊しておくにはもったいない。

壊すけどね。

だが、壊すと言ってもすぐ壊すとか趣がない。この人々が阿鼻叫喚の色に彩られるのを一人眺めるのは楽しそうだ。だが、もつと楽しみ方があるのではないだろうか？ 例を挙げよう。先ほどの神殿で、一番殺すのに燃えたのは誰だ？ 俺は自分の心の中に自問する。答え？ 決まっている。あのエルフだ。ほぼ同位くらいで、王様も燃えたが、あれは俺をこの世界に召還した張本人だからで、この世界に俺を召還した張本人はすでに一人もいなくなっている。召還の魔法を唱えた者なら、まだいるだろうが、それは上からの命令に従っただけであって、俺をこの世界に召還した張本人か？ と聞かれると、疑問符が浮かぶ。まあ、結論だけ述べると、殺したときに最大級の感慨というか感動を得られるのは、相手と親しかったとき。ということだ。かといって、親しすぎると殺せなくなるな……と考えた。

「どうすつかー」

前途多難だ。世界を壊すにも、ただ壊すだけじゃ飽き飽きとする。なにかアクセントが欲しい。親しくなってから殺すというのも、人間の感情ほど操るのが難しい物はないので、途中で世界を壊すのをやめにしようかな、と思ったら本末転倒だ。

そんな風に完全に殺人鬼な考えをしていると、街の中で、一つの店に目がいった。活気がある街の中、負のイメージを出し、鬱々とした空気が漂っている。先程俺が味わった、血と肉という死の空気

とはまた違う、絶望の空気だった。

「なんだ？ あれは」

勇者補正なのか、完全に文字は読みとれ会話はできるので、その店に目を凝らすか……微妙に遠くて見れない。歩いていけばいいな、と当然のことを考え、歩いた。そうして見えたのは……

「奴隷の店、エスクラボ」

奴隷店か。俺は興味を持った。一人で世界を壊す旅というのもおもしろそうだが、いろいろ不自由はあると思うし、二人の方がいろいろ楽しいだろう。三人以上だと、また違ったデメリットが出てくると思うので、二人旅くらいがちょうどいい。多分異世界補正で、奴隷も大体は可愛いだろう。今、ざっと街を見ても、特別顔が……というような人はいないし。基本的に美女、美少女だ。多分奴隷も例外ではないだろう。やっぱ、旅の同伴をするなら美少女とか美女がいいよね！ というような低俗的な結論に、俺は至った。

カランコロン。俺は店のドアを開けた。

奴隷は店先に並べられていた。大体全員可愛かった。美少女と呼んで差し支えがない。だが、アクセントとしては微妙だった。目に面白くない。あるのは奴隷になったという諦めか、奴隷になっても逃げてやるという反抗か。その二つだけだった。

「どれかお気に召した奴隷はありましたか？」

店主が俺によって来る。奴隷で一儲けしたそこら辺の成金だろう。「微妙だな。他はいるか？」

微妙、という言葉が出た瞬間、店主は一瞬イラッとしたようだった。

だが、俺に購入の意欲があると見ると、一瞬で目の色を変え、商売人の目になった。商売………！？

俺、金持ってねえや。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9191w/>

---

世界を壊せや勇者様 ~ world is broken a man of valour ~

2011年9月25日00時18分発行